

## デジタルアーカイブの連携に関する実務者協議会(第6回) 議事概要

日時：平成28年11月25日(金) 15:30～17:30

場所：中央合同庁舎4号館 共用1202会議室

### 【議事】

1. 地方のアーカイブ構築と連携の促進に向けて
  - (1) 提供側と利用側とで作り上げるコミュニティアーカイブ事例
  - (2) 地方におけるデジタルアーカイブ連携の現状と課題について
  - (3) デジタルアーカイブ構築・連携を促進するための人材育成について
  - (4) 地域情報化アドバイザーの取組について
  
2. 統合ポータル構築・連携の方向性について
  
3. メタデータのオープン化等検討ワーキング報告

### 【概要】

1. 地方のアーカイブ構築と連携の促進に向けて
    - (1) 提供側と利用側とで作り上げるコミュニティアーカイブ事例
- せんだいメディアテーク・甲斐氏より、資料1-1に基づき説明。
- 質疑の内容は、以下の通り。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・付箋紙を貼っていく取組みはとても良い。アーカイブは提供者側から利用者の視点をもっと強く出すのが重要で、ファシリテータとして繋ぐ役割が重要。ここではデジタルのコンテンツに限らないと思うが、どんどん身近なものになるのが大事だと理解した。これを実行する上での肝、留意点はあるか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・古い写真を紙焼きにして公開すると、それを見た高齢の人が喋り出す。若い人もそれに耳を傾け、世代を超えた繋がりができる。こうしたことが起こりうるということは、自明のようでもあるが、それをどう魅力的にディレクションしていくかが難しい。企画の力、アイデア、時間、いずれも足りない状況だ。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・活動的にできたものがまた次の活動に利用され、新たなコンテンツになり得る。デジタルコンテンツを広げるためにこの回し方が重要と思っているが、いかがか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・コミュニティ・デザイン、コミュニティを維持し深めるためには、建築のようなハード的な対応、あるいは政策的対応の奥に、もっとソフト的なものとして、アーカイブをうまく活用しうるのではと考えている。コミュニティアーカイブという言葉自体があまり使われていないが、これが有効だという認識がより一般化することで、市民側も施設側もノウハウが蓄積していくだろう。だが、そのために時間が追いつかないのが現状である。

(高野座長)

- ・ファシリテートの階層構造がある。うまくいっているように見える。

(東京国立博物館 田良島課長)

- ・取組において、フライヤーなどの物（紙）が溜まると思うがどうしているか。物を集めるのではなく、情報を作り出すのみの枠組みであると理解してよいのか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・基本的にはデジタルデータのみを持つようにしているので、サーバを用意して保管している。例えば、事例として紹介したクラブのフライヤーなどはPDFにして保管し、現物自体はコレクターの方にお返ししている。我々は博物館ではないので収蔵機能はない。フライヤーなどは他に収蔵するような施設はないだろうから、我々で現物も保全できればよいのだが、いまのところは「在り処を知っている」という段階にとどまっている。

(高野座長)

- ・NPOなどが実際の資料は持っているのだろう。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・デジタルデータとして保存するという理解でよいか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・結構である。他方で、データがどこまで膨らむのか、ということについて危惧はしている。一昨年、去年と1500万円をかけてシステム改修を行い、バックアップの仕組みなどを作ったところである。震災のデータで容量がいったんいっぱいになったところ、3、4倍の容量を用意した。だが、これもいずれ不足することをおそれている。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・保管するデータに関して、フォーマットやクオリティについて基準はあるのか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・一定のものはある。現在も国立国会図書館とメタデータの連携はしており、震災関連のデータについては、国会図書館にラストリゾートとしてデータを預かって欲しいとはお願いしている。クラウドがあればとても安心。

(高野座長)

- ・ファシリテイトという活動でやっているが、なかなか貢献が市にストレートに評価してもらえないというところで、成果のメトリクスというか物差しのようなものはないか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・明確なものはない。民話の保存を行っている市民グループが、民話を収録した 1800 本のカセットテープを博物館に保管をお願いしたが、断られた。それを我々がデジタルデータにすることを引き受けた。そうして、映像も記録していくなど活動も膨らんでいくが、それでも、「ただの民話」だと価値が低い状態。そこで、我々がアーティストを交えて、もう一段重要なものとしてステージを上げて発信することで、「民話ってそういう側面があるんだね」ということを認識させるようにして、価値を担保しようとしている。

## (2) 地方におけるデジタルアーカイブ連携の現状と課題について

○岡山県立図書館・森山氏より、資料 1 - 2 に基づき説明。

○質疑の内容は、以下の通り。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・この 20 年間での変化や、当初やろうと思って実際にはできなかったことがあれば教えてほしい。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・出版物のデジタルアーカイブという、図書館としての本来的な方向に向かわずに、古文書のデジタルアーカイブ終了後、著作権問題の生じないやりやすい方向に向かい、体系的なものにならなかったという点が挙げられる。学校にも協力を求め、メタデータやコンテンツを登録できるように仕組みは用意したが、なかなか進まなかったということがある。

(東京国立博物館 田良島課長)

- ・参考資料に成果が掲載されているが、MLA 連携の成果として、博物館のコンテンツ約 12,000 点と記録資料館約 70,000 点は目録か。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・博物館については、目録とコンテンツのセット。記録資料館は、目録のみのものもある。

(東京国立近代美術館 水谷室長)

- ・県立博物館が参加したとの話があったが、県立美術館は参加しなかったのか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・県立美術館にも呼びかけたが、やりたいができないとの返答であった。

(高野座長)

- ・美術館側に具体的な障害があるのか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・デジタル化するという機運が美術館の中に生まれなかったことが大きい。あとは権利処理の問題もある。

(東京国立博物館 田良島課長)

- ・岡山では民間美術館として林原美術館が充実したコンテンツを持っていると思うが、そちらとの連携はいかがか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・そちらにも声をかけたが、入ってもらえなかった。デジタル化が進んでいないという、美術館と同じ状況だった。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・気運については、自分も経験したので理解する。手間やお金など、具体的に問題はあったか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・手間・金以前の問題がある。図書館の業務において、優先順位ではアーカイブはオプションになっている。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・岡山県は政策的にアーカイブを進められたのにそのような感じだったのか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・研究会や推進協議会で呼びかけてきたが、図書館や他の機関も含めて一部に留まってしまう。極論すると、アーカイブというものが評価の対象にならないことが要

因。

(高野座長)

- ・岡山県はアーカイブが圧倒的に進んでいる県であるが、そこですら障害が多かったということ。県の百科辞典のようなものということで郷土情報ネットにトライされているが、作られたものの著作権というか、他の人がこれを使いたいとか、他県の人々が参考にしたいとか、ウィキペディアに採取したいとか、これ自身を外に対して開いていくのはどういう形で行っているか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・著作権の処理は応募した人がクリアしてもらおう。デジタル岡山大百科で公開することのみが条件なので、あらゆるところで著作権が当館に帰属するようなことはしていない。

(高野座長)

- ・参加する側が、例えばクリエイティブコモンズの自由と言え、そのコンテンツは自由に羽ばたいていくということで、それを妨げてないということか。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・妨げてはいないが、流通していくための許可については組織としては関与していない。

(高野座長)

- ・そのようなところも整理していく必要があるかもしれない。

### (3) デジタルアーカイブ構築・連携を促進するための人材育成について

○岐阜女子大学・井上氏より、資料1－3に基づき説明。

○質疑の内容は、以下の通り。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・デジタルアーキビスト資格は具体的にどういった人が取得するのか。教育の分野の人が多いのか。資格取得後のシステム改変等への対応はどうしているか。

(岐阜女子大学 井上教授)

- ・上級指導者の半分は大学の先生が、自分の講義で使う人が多い。現場の担当者として官公庁の職員など色々な人がデジタルアーキビストの資格を取得している。この資格の取得に当たって講習と試験を課しており、資格取得後も、毎年無料で研修会を行い、技術の維持・向上を図っている。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・様々な機関や立場の人がいることでの課題はあるか。

(岐阜女子大学 井上教授)

- ・アーキビストに求められる最低限のラインとして開発仕様書が見られるようにならないといけない。以前、震災アーカイブの権利処理を行ったが、権利処理が壁となりすべてをアーカイブ化することができなかった。資格取得者といっても差があり、同一のプログラムで育成すると苦勞する。

(高野座長)

- ・科博の話は、大学で研究者が作っているようなDBにも繋がっていく話である。

(岐阜女子大学 井上教授)

- ・大学の博物館や研究室は受け入れ順などのコレクション番号を付しているだけの管理になっているところが多くある。国際的に認識できる機関コードなど国際標準で出そうというスタンスはない。このような博物館はそもそも外部に展示物を出していくつもりがない。

(高野座長)

- ・省庁の関係でもだいぶ距離が遠いせいか、本来は距離が近くあるべき科博と大学の博物館が随分と遠くなっているように感じる。

(岐阜女子大学 井上教授)

- ・同じような話として、研究の世界では、国内にデータがあるにも関わらず、国内のデータにアクセスできないために、欧米にデータを見に行くということが現実起こっている。これは、「浮世絵」と同じ状況であり問題がある。

(4) 地域情報化アドバイザーの取組について

○山崎構成員より、資料1－4に基づき説明。

○質疑の内容は、以下の通り。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・地方自治体のレベルでの電子化の対象は文化財が中心だとすると、仏像から公文書のような文化財の種類に応じた技術を選ぶ時点でバリアがあると理解する。
- ・そうすると、それぞれの地域でやるよりは、文化遺産オンラインのような中央で動かしているものに、打ち込めば済むという考え方もできる。
- ・しかし、地域で作りたい必要な情報を必ずしもそこに入れられない。使うことも含

めたニーズと、実際に作る作業のトレードオフとなると思うが、それについてどう考えるか。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・秋田県では博物館、美術館と連携をやろうとしたが進まなかったのはメリットが少ないからである。入館者数が増えなければ意味がないと考えがちである。未だに MLA 機関は入館者数が全て評価対象である等、評価の仕組みが不十分である。
- ・地方でしか持っていないものもたくさんあるので、本来は自分たちでアーカイブを作って、地方の中で活用していきたいと考えている。そのため、国に投げてデジタル化するだけでは意欲が湧かないのではないかと思う。
- ・とは言え、自分たちで作ったものを自分たちが活用しながら、全体として国際的に使ってもらうのは、非常に名誉なことだと思し、意欲も高まるものだと思う。その道が付いていることがとても大事だし、そこそこお金を出して支援すべきと考える。

(高野座長)

- ・先ほどの議論にもあったが、評価の軸というものが時代後れになってきている面が出てきているということ。それを変えさせるアイデアというものはどうか。

(東京国立近代美術館 水谷室長)

- ・5年ごとの博物館総合調査では、ICTの活用を図るという項目があるが、そもそも台帳を持っていないという機関がある。活動の基盤を見直さないといけない。学芸員の資格取得に当たって「博物館メディア論」という科目はあるが、図書館には検索システムがあるのに博物館にはなぜないか。博物館や美術館には「見せる」というメンタリティはあるが、「見てもらう」というメンタリティはない。なぜなら、そこにインセンティブがないからである。日本博物館協会などが働きかけて文化庁にインセンティブを考えてもらわなければならないと思う。

(高野座長)

- ・むしろそこに、例えば、電子目録化率ワースト10とか毎年載せるようにしていけば、少しは変わるかもしれない。

(東京国立博物館 田良島課長)

- ・結局、博物館・美術館は外向けに出すインセンティブがあまりない。それらは、基本的に公開の形態が展示で、選択して見せる形。選択しないものは、学芸員の頭の中では極端に言えば見せなくていいもの。当館で全所蔵品DBをメンテナンスできるようになったのは、それを使わないと仕事ができないようにしたから。展示、貸出、修理をDBに紐付け、これを使わないと来年の展示は作れないとした結果、皆が使い始めている。中が使わないと外には出ていかない。もう一つは館同士の仕事

の中でお互いの情報を持ち合える仕組みを作るということ。バックアップの体制として考えておく必要がある。

(高野座長)

- ・図書館で OPAC が出てきたのも ILL (インターライブラリーローン) のための貴重な DB ということで真剣に取り組むようになったということはある。文化庁として、文化財を持っている組織に対して登録を仕向けることは可能か。

(文化庁文化財保護調整室 石崎室長)

- ・文化遺産オンラインにデータを載せてもらうように取り組んでいるところ。載せた館側へのメリットについては、当庁としていつも悩んでいる。逆に、デジタルアーカイブを公開していないことで館がデメリットを負うような構造にしていけばよいのかもしれないが、現在は解決策を検討している状況。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・総務省の研究会で MLA 連携の実験をやったときに、説得に行ったが当初は理解が得られない機関があった。意欲が高まらないのに手間がかかるためである。アクセスがあれば問い合わせへの対応も必要で、それだけでも仕事が増える。評価指標が入館者数であれば、メリットは感じられない。
- ・最終的には国の仕事だと言って通してもらった。県の仕事としては通らなかった。体験すればそのメリットが分かる。最初のブレイクをどうするかの問題だと思う。そのために多少強いプレッシャーをかけるべきである。

(東京国立博物館 田良島課長)

- ・所蔵品データを整備しないと、文化財保護法第 53 条が適用されない、くらいのことがあれば、皆アーカイブにのるのではないか。

## 2. 統合ポータル構築・連携の方向性について

○事務局より、資料 2 に基づき説明。

○質疑の内容は、以下の通り。

(東京国立近代美術館 水谷室長)

- ・独立行政法人国立美術館の理事長は近代美術館の馬淵館長であるが、このアーカイブの議論に注目している。実務者協議会の会議報告をすると、文化遺産オンラインは発展しているのか、このまま NDL サーチと連携してはたして意味があるのかということ聞かれている。文化遺産オンラインについてはここ入れすべきところを確認して、一新してほしいと思っている。

(文化庁文化財保護調整室 石崎室長)



- ・てこ入れが必要なのは感じている。皆さんと力を合わせて一所懸命やっていきたい。

(高野座長)

- ・いい連携ができればと思う。

(東京国立博物館 田良島課長)

- ・国立博物館は4館あるが、今年度、4館の共用DBの開発を進めていて、連携機能の実装した形で公開したいと考えている。全所蔵品とはいかなくても、万単位での公開となる。それを文化遺産オンラインに載せるのはそれほど難しいことではないと思う。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・英語のインターフェースはぜひ進めてほしい。ないと海外で紹介するとき困る。
- ・せんだいメディアテークでの取組みに強い印象を受けた。森山さんの活動でもそうだが、地元の人が入って作り、それを世の中に返すサイクルがうまくできて初めてデジタルアーカイブが発展していくのだと思う。それはアグリゲータというよりファシリテータの話だと思う。そこを続きの話としてやっていけたらよい。
- ・デジタルアーカイブの利用の話でいつも出てくるのは、観光、地域振興、地域教育だが、実際に本当に役に立ったという話はあまり聞かない。そうしたことに関し、例えば、意外な発見、グッドプラクティス・グッドエクスペリエンスがあれば集めていくこともここでは必要と思う。うまくできた事例を見ると、元気が出るということもある。

(高野座長)

- ・甲斐氏のせんだいメディアテークが最も理想的に進んでいる。中間報告の絵で活動を位置づけるとすると一番上と実は一番下ですという話があったが、同じ場所で、同じキュレーション・ファシリテイトの下で起きているということが一番重要かもしれない。我々はデータを挙げるだけ、或いは、データを扱うだけと言っているうちはうまくなくて、どうやって何かを投げたら多くのものが引っ付いて返ってきて、それをこちらで活用するか、そこが繋がっている強さを、話を伺っていて感じた。

(秋田県図書館協会 山崎顧問)

- ・「束ね役」の役割と名称について、前回も話が出たがこの言葉は実際の役割からすると、やや狭い印象。束ねた上で、発信もする。もう少し広い言葉の方がよいのではないか。
- ・どのレベルかで役割もかなり異なる。位置づけにより、例えば県レベル、国レベルと色々あると思うが、セクションごとに機能が変わる。意識啓発、人材育成という話になるとできないというケースが出るかもしれない。例えば、一つだけでなく複数の役割を持てばよいといった考え方も示した方がよいと思う。

(高野座長)

- ・ファシリテータの日本語訳はあるのか。

(せんだいメディアテーク 甲斐アーティスティック・ディレクター)

- ・「キュレーター」の語源はケア、「お世話役」という意味だと聞いた。キュレーション、キュレーターの範疇として考えたほうがよいのかもしれない。
- ・私たちの活動を褒めてもらってありがたいが、現場はかなり厳しい。
- ・我々は国立国会図書館とメタデータ連携をしている立場で、生涯学習施設ということで美術館・博物館に準ずる施設として位置付けられている。そのように制度にもとづいた施設同士の連携は、BtoB という感覚でいる。他方で、ファシリテータはBtoC の役割。BtoB の話と BtoC をいっしょにやると混乱するのではないか。分別して議論すべき。

(岡山県立図書館 森山総括参事)

- ・デジタルアーカイブにより利用がどのように促進され、利用者がどのような評価をしてくれるかという追跡調査については、既存の枠組みではやっていない。そういうことをすれば促進されると思う。アウトカムをどう捉え進めていくかがポイントになると思った。

(岐阜女子大学 井上教授)

- ・デジタルアーカイブというどうしても文化財に偏る傾向があるが、ファクトデータをしっかりと残すということが議論の本丸である。現在、自治体の統廃合が進むとともに、失われていくものが増えている。大切な資料や文化財は残していかなければならない。アーカイブの将来像を考えていくべきときである。

### 3. メタデータのオープン化等検討ワーキング報告

○事務局より、資料3に基づき説明。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・アーカイブの長期利用、保存の話は必ず出るので、ここで全てカバーするのは無理としても、そういった項目があることは認識しておくべき。

(高野座長)

- ・こういう要件について配慮しながら作ったらいいとか、それについてしっかり配慮してあるアーカイブの特徴とか良さなどが客観的に例としてわかるような評価軸を提供できたらよいという話になっている。当協議会でレビューしていただき、最後は承認いただくというステップを踏みたいと考えている。

(筑波大学大学院 杉本教授)

- ・そのときにメタデータの長期利用の話も抜け落ちがちなので、お願いしたい。

#### 4. その他

○次回会合は、調整の上、追って連絡する

以上